

「限界集落」化の歴史的プロセスに見る山村の未来 ～ 高知県旧物部村の事例から ～

楠瀬 慶太

Keita Kusunose

九州大学大学院
比較社会文化学府

大野晃氏は、高知県の中山間地域の現状から「限界集落」という概念を提唱した。氏は昭和30年代以降の高度経済成長期以降の山村（「現代山村」）を分析の対象とし、高度経済成長による地域間格差の進行や林業衰退を「限界集落」化の歴史的プロセスとした。

本稿では、大野氏と同様に高知県の山間地域を対象にし、氏が対象としなかった「限界集落」化以前の山村に注目し、「限界集落」化の歴史的プロセスに迫った。

その結果、「限界集落」化以前の山村では、川の流域を中心として、山資源の平野部での需要・消費と山間部からの供給のサイクルによって、人・物が動き、農・工・商業が一体化してひとつの経済流通圏が形成されていたことが明らかになった。米もろくに作れず貧しいかに見える山村が、中世以来栄えてきた理由は平野部や都市部と結びついた豊富な山資源の活用にあったのである。

しかし、高度経済成長以後の山村では、それに伴う生活様式の変化によって山資源の都市部・平野部からの需要を失い、その発展を支えた生業を衰退させた。結果、山間部は平野部や都市部との結びつきや関係性を失い孤立していったのである。つまり、大野氏が述べる高度経済成長による地域間格差の進行や林業衰退は、山の生業衰退以後に起こった現象であり、「限界集落」化を決定づけた要因でもあったのである。

山村社会が失った、河川流域の地域的な関係性・結びつきを取り戻すことが地域再生にとって必要である。

1 はじめに

－「限界集落」化のプロセスとは？－

近年、新聞やテレビに「限界集落」という言葉が踊る¹。「限界集落」とは、当時高知大学人文学部教授であった大野晃氏（現長野大学教授）が高知県の中山間地域の現状から提唱した概念である（大野1991）。

日本の中山間地域や離島では、人口・戸数の激減と高齢化の急速な進行で、集落の自治機能²が低下し、集落は社会的共同生活の維持が困難な状態に追い込まれ、やがて消滅に向かっていく現状が指摘される。大野氏は、65歳以上の高齢者が自治体総人口の過半数を占める状態を「限界自治体」と名付け、この定義を集落単位に細分化したものととして「限界集落」という概念を提唱した³。限界集落に次ぐ状態を「準限界集落」と表現し、55歳以上の人口比率が50%を超えている場合とされる。また、限界集落を超えた集落は「超限界集落」から「消滅集落」へと向かう。大野氏は、自治体間格差の分析と集落の状態分析を行う中で、このような現象が、農工間不均等発展による産業構造の歪みによってもたらされた大都市と農山漁村・離島を抱える地方との間における地域間格差の拡大がもたらした結果だと考えた。つまり、この格差が産業構造に規定された構造的な地域間格差であり、賃金の格差をはじめ就業機会の多少の格差、医療・介護や福祉にかかわる格差、教育にみる学校間格差等が離れがたく重層化し、この格差が社会生活を規定し、地域間の人口

移動を促した結果だとする。

また、大野氏は「限界集落」化のプロセスのひとつに林業の衰退をあげる。輸入木材によって国内の林業は衰退し、山村の人口減と高齢化をもたらし、それにより手入れの行き届かなくなった人工林（スギ・ヒノキの針葉樹林）が荒廃し、集落そのものの消滅も進行したとする。

大野氏は、昭和30年代以降の高度経済成長期以降の山村（「現代山村」）を分析の対象とし、高度経済成長による地域間格差の進行や林業衰退を「限界集落」化の歴史的过程とする。つまり、山村の衰退の過程に注目して「限界集落」化を説明する。このような山村の「限界集落」化のプロセスは、実に悲観的に描かれるわけであるが、私が歩き、見、聞いた昭和30年以前の山村の姿は、それに反して実に豊かなものであった。私は、山村がどのように全く異なる姿へと変貌した理由は、「格差」のみにあるのではなく、格差を生み出した地域間の関係性の変化にあると考える。

それを検証するためには、衰退の過程だけでなく、山村の発展の過程を歴史的に検証する必要があると考える。山村を豊かにしたものは何だったのか。山村は何を失ったがために「限界集落」化したのか。本稿では、大野氏が検証した高知県の中山間地域での現地調査をもとに、「限界集落」化の歴史的过程を検証し、山村の未来に何が必要なのかを考えてみたい。

表1 集落の状態区分とその定義（大野2008より作成）

集落区分	量的規定	質的規定	世帯類型
存続集落	55歳未満人口比50%以上	跡継ぎが確保されており、共同体の機能を次世代に受け継いで行ける状態	若夫婦世帯、就学児童世帯、跡継ぎ確保世帯
準限界集落	55歳以上人口比50%以上	現在は共同体の機能を維持しているが、跡継ぎの確保が難しくなっており、限界集落の予備軍となっている状態	夫婦のみ世帯、準老人夫婦世帯
限界集落	65歳以上人口比50%以上	高齢化が進み、共同体の機能維持が限界に達している状態	老人夫婦世帯、独居老人世帯
消滅集落	人口・戸数が0	かつて住民が存在したが、完全に無住の地となり、文字通り集落が消滅した状態	

注：準老人は55歳～64歳までを指す。

2 | 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

先に述べたように本稿の目的は、「限界集落」化のプロセスを、高度経済成長期以前の段階に立ち戻って歴史的に検討することである。

大野氏は「限界集落」化により(1) 伝統芸能・伝統文化(2) 歴史的景観(3) 自然環境が失われることを指摘する。これらは、「限界集落」化以前の山村の発展を支えてきた要素である。その再発見と再生に、山村の地域力向上を考える手がかりがあり、その検討が本稿のもうひとつの目的ある。しかし、その再発見には、それが失われた、もしくは失われつつある「現代山村」を対象にしては難しく、それ以前の山村社会を対象とした歴史的なアプローチが必要とされるのである。

(2) 研究対象地域の選定

－限界集落と消滅した村々を目にして

本稿が対象とするのは、大野氏が検証した高知県の中山間地域である香美市物部町（以下、旧物部村）である。本地域は、土佐国有数の荘園である大忍庄の荘域にあたり、多くの研究者が注目してきたフィールドである⁴。また、いざなぎ流と呼ばれる特殊な民俗を残す地域である⁵。

しかし、2007年度夏に調査に入った時に目にしたのは、多くの「限界集落」と「消滅した村々」の姿であり、古代以来長い歴史を育んできたこの土地の景観、そして生活や歴史、民俗などの記憶が今まさに失われつつあるという現実であった。前近代、近代と順調な発展を遂げ、

歴史の中心を担った山村である旧物部村の事例は、「限界集落」化の歴史的プロセスを考える上で重要な検討材料であると考ええる。

また、高知県では高齢化が急速に進行しており（表2）、お年寄りへの聞き取り自体が難しくなっている現実がある。その中であって、旧物部村では、高齢化は進んでいるものの、お年寄りは比較的元気で、多くがまだ農作業に出ており、話を聞ける確率が高い。加えて、この地域は山間部ということもあり、開発の進行、生活の変化が急激でなく、歴史的景観や文化、生活、民俗の記憶が多く残存しており、「限界集落」化以前の山村社会を復原するにあたって、環境の整ったフィールドといえる。

(3) 研究の方法

研究の方法としては、文献資料や統計資料に加え、詳細な現地調査、聞き取り調査を行い、山村豊かかりし頃の大正～昭和初期にかけての村の姿を復原することを目指す。

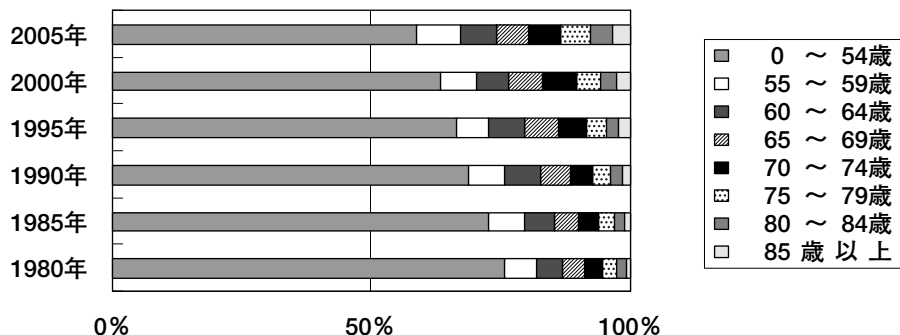
調査は、旧物部村の各集落で行い（図3）、約100人の住民から聞き取りを行った⁶。これらをもとに特にこの地域の発展を支えた生業に注目して、「限界集落」化以前と以後の旧物部村の姿を復原し、「限界集落」化のプロセスについて検討を行う。

3 | 「限界集落」化以前の旧物部村

(1) 旧物部村の位置と環境

旧物部村は、高知平野の北東部に位置し、徳島県木頭村、東祖谷村と接する。2007年3月、土佐山田町、香

表2 高知県の年齢別人口比率の変動（国勢調査データより作成）



北町、物部村の三町村が合併し、香美市の一部となった（図1）。地形は、1000～1800mの高峰が周囲にそびえて急峻で、四国山地に面する山間地域である。村を流れる上葦生川・槇山川⁷流域に棚田、集落が広範囲に点在する（図2）。山間部が多く、水稻耕作に向かない地形であり、高度経済成長以前は、焼畑を中心とした典型的な山村であった。

本稿の対象となるのは、古代・中世の郷名では言えば、上葦生川・物部川中流域の葦生郷、槇山川流域の槇山郷

である（図3）。

（2）旧物部村の歴史⁸－歴史深き土地「^{ニロウ}葦生・^{マキヤマ}槇山」

この地域の開発は、比較的早い時期から始まったと考えられる。旧石器、縄文、弥生、古墳時代には、物部川の下流域にしか遺跡は見られないが、平安期の『和名類聚抄』の郡郷部に山田郷、大忍郷が見え、古代には物部川の上流域にも開発が進んだものと思われる⁹。また、香北町葦生野にある美良布神社、物部町別役にある小松神社が「式内社」として『延喜式』の神名帳に見える。

図1 香美市の領域（著者作成）

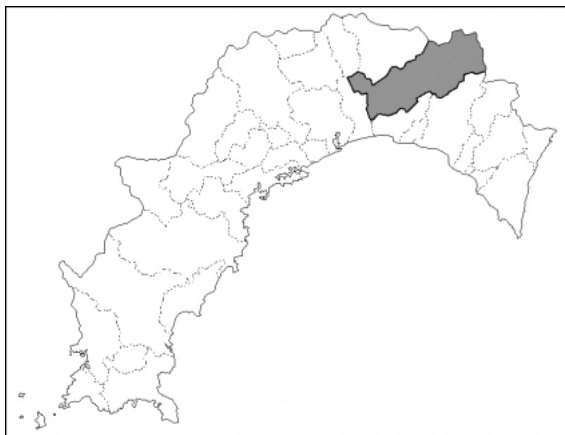


図2 旧物部村の集落分布（著者作成）

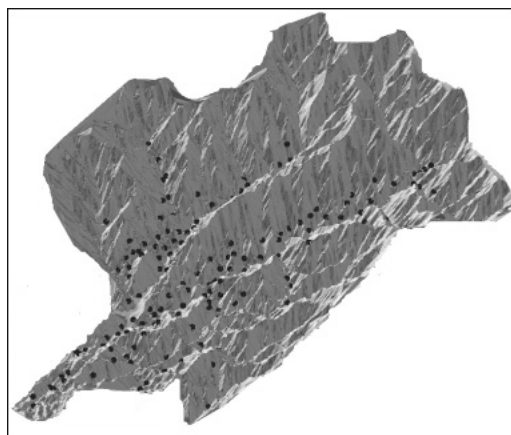
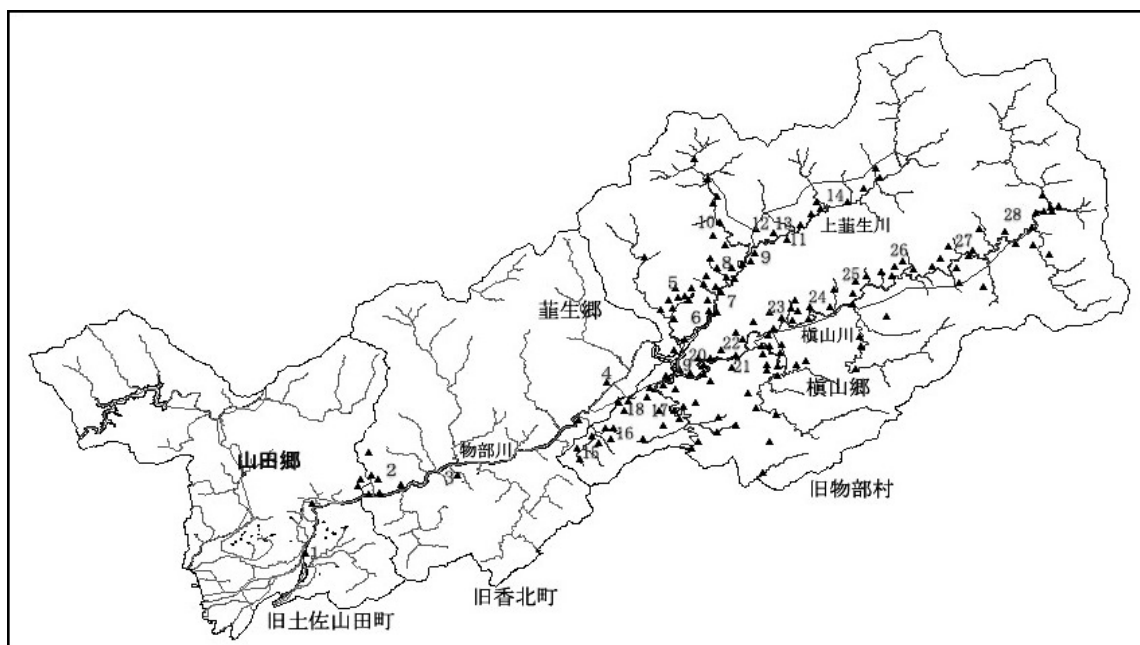


図3 香美市調査地図（旧物部村については▲は調査対象集落、旧土佐山田・香北町については調査集落）（著者作成）



葦生郷は古くは山田郷に属し、美良布野が訛って「葦生」となったと伝える（『南路志』）。一方、槇山郷は大忍庄に属し、槇山の名称は椈の木が多かったので名づけられたもので、文保、文永年間までは椈山と書いたが後槇山の字を用いるようになったと伝える（『被山風土記』）。葦生・槇山ともに平家の落人伝説を持ち、その子孫を名乗る小松、門脇などの各氏が中世期の名開発を担った。鎌倉期以降の多くの文書群はこうした現状を反映している。特に、槇山郷は大忍庄の荘域に組み込まれ、多くの在地文書が残されている。

戦国時代には、葦生郷は山田氏を中心に各氏が支配した。槇山郷では、各名主層が大忍衆として長宗我部氏の土佐・四国平定に重要な役割を果たすことになる。

長宗我部氏滅亡後は、在地武士は山内氏入国とともに知行権を没収され、百姓並とされた。彼ら伝統勢力は被官＝家来の留保を許され、さらに村方での実力を認められて村役人に起用され、江戸期の土佐の山間部の土地開発に重要な役割を果たす。この地域は、その後も土地開発と作物栽培で順調に生産力を発展させ、平野部、都市部への重要な食料・原料供給地となっていく。

（３）旧物部村の生業

先に述べた旧物部村の歴史的発展の原動力は、豊富な山資源を中心に据えた生業にあった。現地調査および聞き取りから明らかになった各生業の実態を以下に述べる。

①材木の伐り出し

山資源の中で、古代から主流な搬出品となったのが材木である。近代以降の材木の伐り出しには、営林所（国有林）と民間（民有林）の伐り出しとがあった。トガやモミといった大木のある標高の高い山は大概が国有林で、営林所の管轄だったが、他にも民間が上木だけを買って、人を雇って切り出していた。木材の伐り出しは山師の仕事で、2週間程、山小屋に泊まり、大鋸で木を切り倒して、丸太にして、木馬で川まで下ろした。チェーンソーが普及するまでは、大鋸でどんな大木も切り倒した。このような山道具は、山田の神母木や大桁の鍛冶屋が、山師の注文に答えて作っていた。

②材木流し

材木を伐り出したら、今度は搬出である。陸上交通の整備が進む以前は、川（物部川）が材木の搬出に利用された。山から伐り出した材木は、川岸に運んで大水が出たときに流された。この材木流しは中世以来のもので¹⁰、近世期の実態¹¹が、ある程度昭和の初期まで同じように続いていたものと推測される。以下、聞き取りによって明らかになった材木搬出の実態について述べる。

材木搬出には、2種類の方法があった。ひとつは森林木道（トロッコ）で、もうひとつが材木流しである。近代には、前者は営林所の材木（特に国有林にはモミやトガ、ヒノキなどの大木が多い）の搬出に使われ、後者は民間の材木の搬出に使われた。材木は、山師が伐採した後、大鋸などで加工して丸太にして、木馬で引いて川原まで出してくる¹²。仕事には人数が必要なので、山師は人夫を雇用して搬出を行う。この際、杉などの木材の皮も重要な資源となるため、全て剥がして軽くしてから流した。山師は、晩方になると人夫が剥いだ杉皮の量を坪いくらで測って、その代金を人夫に与える。杉皮は家の屋根などに使われることもあるため、山師の中には代金として杉皮を渡す者もいた。川原¹³まで出した材木は、大水が出た時に流すか堰を作って水を貯めて一気に流す「堰流し」¹⁴によって下流まで出された。材木流しは、上葦生川では大正頃まで、槇山川では昭和初期まで行われていた。昭和の始めには川はいつも材木で埋まっていたという。槇山川～物部川～舟入川までの材木流しは終始同じものではなく、川幅や地形を考慮して、各段階で異なる方法がとられた。

まず、槇山川の奥から大桁の下落合までは、材木は丸太一本一本で出された。場合によっては小さな筏を組むこともあった。大桁落合に集められた材木は、6～7本をカツラかフジの縄で括った2間×6尺程の筏に組まれ物部川を流された。筏は4つほどを連結させて前と後に人が乗ってとび棹で操って神母木まで流された。最奥の別府から神母木まで行くとおおよそ3日間ほどかかったので、途中、岡ノ内、大桁、美良布などに筏をつけて宿泊

した¹⁵。材木流しは、水が怖くない人間が日当で雇われた。仲介者は根木屋にいた。材木流しには、先番、中番、後番とあって、賃金はそれぞれ一番賃、二番賃、三番賃となっていた。先番が岩に引っかかった材木をのける仕事で最も危険で給料も高く、うまい人間が任された。先番が道を確保したのに中番、後番が続いた。後番は神母木まで行ったが、流しの親方は最初から最後まで同行した。また、^{のりとち}則友川や^{さかまい}坂舞川、^{しょうたにあい}庄谷相川などの物部川・槇山川に注ぎ込む川からも材木が流されてきた。そのため、物部川・槇山川への出口では、^{かわくち}川口の「^{はねば}羽場」や^{おおび}大比の「^{うまぜ}馬瀬」、^{ふちゅう}府中といった積み替えおよび筏組が行われる場所があった。筏流しは夏が本場で、夏には川が筏で一面になって、神母木では歩いて向こう岸に渡ることもできた。

筏は神母木に着くと、物部の筏流しから神母木の筏流しに引き継がれた。また、馬で引き上げられて加工される材木もあった。神母木には、筏流しの業者がたくさんいた。彼らによって、連結された筏の長さを1/2程に切り離して、舟入のコル（水路）へ入って南国・高知へ運ばれた。また、人件費をケチってバラで丸太ごと流してくることもあった。特に、大水の時には山田堰などは越えてしまって、浜まで行ってしまうこともあった。材木には切り口に後主の焼番が入っていて、浜まで取りに行っていた。

③トロッコ輸送

昭和初期まで、槇山川の影側には、別府から大比の馬瀬まで、営林所のトロッコ（機関車）が走っていた。杉熊、桑ノ川へもトロッコが入っていて、別府落合、岡ノ内川口などはその基点だった。別役、岡ノ内川口、押谷佐岡には、トロッコのすれ違いができる場所があった。トロッコは材木の運搬と食料品の調達が目的で、1日に2往復していたが、荷物がないと出発せず、土砂崩れや落石で運行はスムーズではなかった。冬には、滑らないように線路に砂をまいて運行した。トロッコの後には客車があって、タダで大栃まで行けたが、危険と隣りあわせだった。トロッコに乗って、材木を運ぶ仕事もあったが、途中、材木がはね落ちることもあって危険な仕事だった。

このような複雑な木材搬出・流しのシステムは、地域を越えて相互補完的に結びつき、人と物が動き、この地域全体を潤していたのである。

④川船¹⁶

中世期から川船の利用があったかどうかは、史料がないため明らかではないが、江戸期には物資輸送に駄賃馬や牛の背に加え、物部川を利用した船便が使われた¹⁷。

近代になっても、川船は使われており、砂を積んでくる船や荷物を積む船が昭和初期まで往来していた。特に、大栃へと登る船は、川を吹く風を利用した帆船であったという。

⑤賃牛¹⁸

昭和の始めまで、カヤなど牛草の豊富な山間部の物部からは、平野部から山間部にゆくに従って変わる田植えの時期差を利用して、多くの牛が香長平野に貸し出された（賃牛）。

賃牛には、1回貸し（3月～4月）、2回貸し（8月）があった。山田・吹田・美良布に賃牛市があって、市の仲介で各農家に貸し出された。借りた人によっては、2～3人で仲間遣いをするので牛は弱って傷を負って帰ってくることもあった。平野部は餌の草も少なく労使されるので、牛は痩せ細って帰ってきた。賃牛の代金は、3頭持っていけば賃米1石（3俵）ほどがもらえた。後には現金に変わった。牛を返してもらう時には、角土産（牛の角に焼き魚を掛けてくれる）も添えてつけられた。大概、香長平野の農家から「何月何日に追い上げる」という手紙が来て山から受取りに行った。

⑥炭焼

山間部の多い韮生・槇山では、炭焼はどこ地域でも行われ、山には炭窯の煙が立つ光景がほうぼうで見られた。炭焼専門家は、大抵の場合、炭の元になるような木のある山を持っておらず、土地主や営林所から、山の上木だけを買う山買いをして、炭焼をしたのだという。山買いには「作り分け」と「切り分け」があって、作りあがった炭を分配することで、山の使用を許可された。前者は1：1で地主と炭焼者が炭を分割する方法、後者は

2：8、4：6といった割合で分割する方法である。契約は1年更新で行われた。炭焼のために、外から山買いをして村へ入って来る者も多くいた。炭は主に都市部の燃料として供給されたため、都市部で冬が寒いと炭の値段も上がった。

⑦三桧（ミツマタ）

明治期に三桧が導入される以前は楮こうぞが紙の原料として供給されていたが、それ以降は楮より三桧が多くなった¹⁸。三桧は、釜で蒸して皮を剥いた後¹⁹、乾燥させ、水へつけてさらすのだが、そのさらし方によって品質が変わった。最も品質が良いのが、川でさらす「川漬け」で、次が谷でさらす「谷漬け」、最も品質が悪いのが、箱に入れてさらす「箱漬け」である。山の水ではあまりきれいにならず、川の水にさらすのが良いという。

⑧紙漉き

楮を原料とした紙は土佐の伝統的な産物である。葦生・榎山の山崎、大栃の大比、北村、柳瀬きたむら やないせは紙漉が盛んだった集落である。戦後、機械化、生活様式の変化が進み、急速に紙漉が衰退していく中で、山崎で最後まで紙漉をしていたのがYさんの家である。以下が、Yさんから聞いた山崎の紙漉の実態である。

先に述べたように、葦生・榎山では三桧の生産が盛んであった。三桧が入ったのは明治になってからで、それまでこの地域で主に生産されてきたのは楮であった²⁰。物部の紙漉達が材料として用いたのは、三桧ではなく中世以来の商品作物である楮であった。

楮は農家から直接買うか、農協から買って仕入れた。購入した楮は黒皮のままで、皮を剥いで白皮の状態にする必要があった²¹。この作業は、内職で山崎周辺の人にやってもらう場合もあった。

山崎で作られていた紙は3種類で、障子紙、傘紙、風紙である。これらの違いは紙質ではなく、紙の大きさの違いだけであった。最も多く作るのが障子紙で、傘紙は出来上がると傘職人の町である山田へと出荷された。山田で傘を買ってみると、水をはじくように油が引いてあった。また、風紙は吉川よしかわの風の絵を書く人に売った。

次に、障子紙作りの工程を見てみよう。まず、白皮にした楮を釜で石灰を入れて煮る。煮え立ったら、水につける。すると、紙は真っ白になる。これを棒で叩いた後、水槽の中でざぶりをして、「すげた」で漉く。漉き終わると、ジャッキで締めて水汁を落とし、少し乾かして、半分に切る。これを紙板に貼り付けて、天気の良い日に外に干す。干しすぎると剥げて飛ぶので、紙の取りこみ時は忙しい。取りこんだ紙は何十枚か重ねてトチの木で作った円形の台の上に載せ、板を当てて包丁で切って、100枚を1束にして障子紙ができあがる。

紙の買付けには、仲買人が県内、県外からも来た。仲買には販売者と専門契約をしている者や買付けた障子紙を自ら売りに出る者、商店へ行って紙を売る者など様々だった。組合などはなく、比較的自由に仕入れ、販売が行われていた。

（４）生業の地域性

葦生は水が多く確保でき、田んぼにできる土地も多いため、米作が比較的盛んである。一方、榎山は水も少なく、田んぼにできる土地も少なく、村のほとんどを占める山を焼いて雑穀を作る焼畑に重点を置いている。また、葦生ではほとんど見られない天水田や半天水田も多く存在していた。この地域の焼畑農業の在り方は、四国・九州山地などの西南日本に広く分布する多様な作物構成と複雑な輪作形式を示す《コバ型》であり（佐々木1972）、ソバ、アワ、ヒエ、大豆、小豆、コンニャク、三桧、カライモ、トウモロコシなどさまざまな作物が作られている。茶、小豆などは標高・温度などによってうまく作れる場所とうまく作れない場所がある。この地域の主食は米のほか雑穀類が多くを占めたが、地域によって、アワをよく作る所、ヒエをよく作る所とがある。

また、この地域には榎山川、上葦川が流れ、どの集落も河川に面している。たいていの人は川で魚をとった経験がある。川にはウナギ、モツゴ、ゴリ、イダ、アユ、エビなどの魚がいた。釜や淵と呼ばれる川や谷の深くなった所では、巨大な魚が目撃されることがあり、釜・淵の主などと呼んだ。漁法は、釣りが「カナツキ」と呼ば

れる鉾で突くかで網を使うことはほとんどない。しかも、魚取りは子供の遊びで本格的に釣りをする人はほとんどいない。農作業・山仕事が忙しく魚を取る暇がないという人が多かった。趣味・余暇・休息として行うケースが多い。また、鯉を家で飼って「洗い」にして食べる家も何軒かあった。魚は、魚屋で仕入れるか、赤岡からの行商人から買うのがほとんどで、海の魚を生で目にするとはほとんどなく、干物になったものがほとんどだった。

（５）旧物部村の地域構造

以上見てきたように、菰生・楨山地域では、山資源の平野部での需要・消費と山間部からの供給のサイクルによって、人・物が動き、ひとつの経済流通圏が形成されてきた。中世まで菰生・楨山の山資源は畿内方面の消費市場へ向かっていたが、近世に入って城下町（高知）が形成され、都市消費市場が生まれて、円滑に流通するようになったと考えられる。この都市需要を背景に山資源の利用は拡大し、商品作物としての山資源の利用はますます活発になり、この地域を順調に発展させた。

昭和の始めまで、農・工・商業が一体化して、物部川流域地域の経済圏は形成されてきた。農業では、田植えの時期差を利用して、牛草の豊富な山間部から耕作用の牛が賃牛として平野部へ供給され、米の少ない山間部では報酬に平野部の米を得る。牛市が山田、美良布、大栃に存在し、仲介者が動き回った。牛は農家にとっては欠かせない存在で、その売買は「ばくろう」によってなされた。工業では、山間部で桑を作って、蚕を飼う。その繭が神母木の製糸工場で加工され、都市部へと流れていく。仲買人たちは繭を村へ買い付けに行き、集散地の神母木まで運んだ。楮は、山崎・大栃などで紙漉によって紙になり、障子紙や傘紙となる。傘紙は和傘の町である山田へと供給されていく。商業では、木材、茶、炭、三桠などの山資源が売買されて、都市部の消費市場へと流れていった。

米もろくに作れず貧しいかに見えるこの菰生・楨山が、中世以来栄えてきた理由は平野部や都市部と結びついた豊富な山資源の活用にあったのである。

4 | 「限界集落」化以後の旧物部村 —変わりゆく村の姿と消えゆく村の記憶—

これまで見てきたように古い歴史・民俗を持ち、豊富な山資源を基礎として順調な発展を歩んできた旧物部村であったが、日本の高度経済成長に逆行するように衰退していった。1963年刊行の『物部村志』ではその予兆が書かれ、1975年刊行の『続物部村史』では過疎化する山村の実態が克明かつ悲観的に描かれている。以下は『続物部村史』から22年を経て、私が見聞きした物部の村の現状である。

（１）村の現状

①人口の減少・高齢化

戦後から人がいなくなりだしたと言う人も多かったが、やはり昭和30年代（1955年～）を境にして、多くの集落から人が平野部へ出て行くようになった（図4）。人口減少は甚だしく、40年間で約1/5まで落ち込み、ついに3,000人を切った（表3）。また、2000年度の国勢調査では、65歳以上の人の割合が5割近いという状況（1,376/2,069人）が報告され、高齢化が急速に進んでいる。著者が尋ねた時も、集落で見かけたのはお年寄りばかりで、若い人の姿はほとんど見なかった。また、一般的に女性の方が長生きであるため、夫が亡くなり、女ひとりで暮らしている人も多い。男女比の逆転現象はそうした事実を反映している（表4）。それでも、お年寄りは皆比較的元気で、朝早くから畑仕事に精を出している（写真1）。息子や孫が平野部に出ていても、自分の生まれ育った所に居たいと村に残っている人も多い。

②集落の消滅

人口流出の結果は、集落の消滅に直結している。世帯数が、40年間で約半数に減っている状況がそれを物語っている（表3）。消滅した集落（写真2）、消滅の危機に瀕した集落（写真3）は、標高が高く住みにくい土地に多い。消滅した集落に関しては、移住者を追跡して聞き取りを行ったが、そうしたことが不可能な地域もあった。

また、ダムに沈んでなくなった集落もある（水通、柳瀬など）。ダム建設により移住した山崎水通のYさんは、

図4 県中央部への人口移入（渋谷2006より転載）

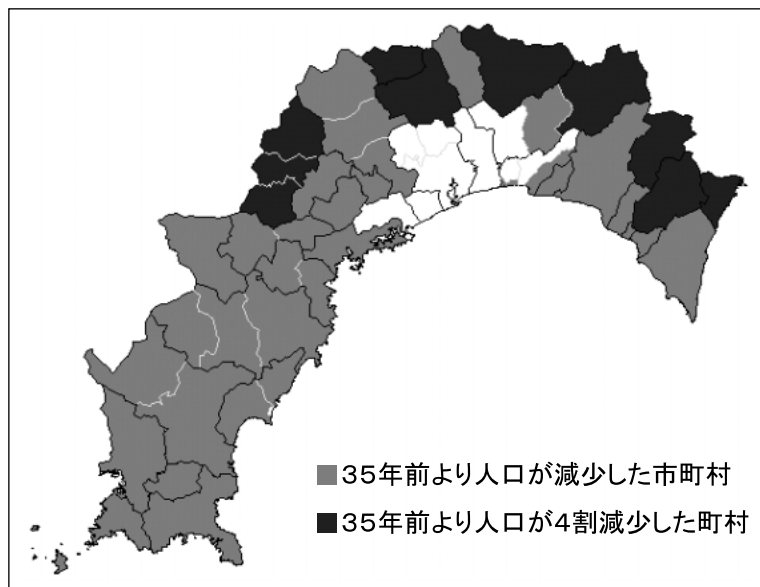


表3 物部村の人口・世帯数の動態

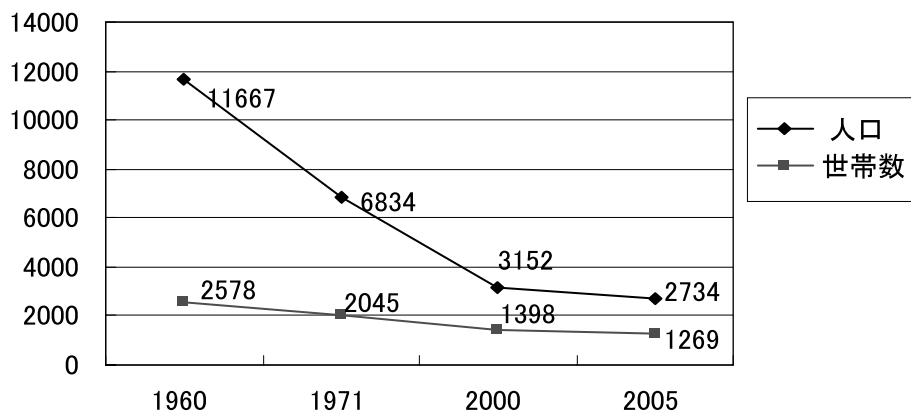
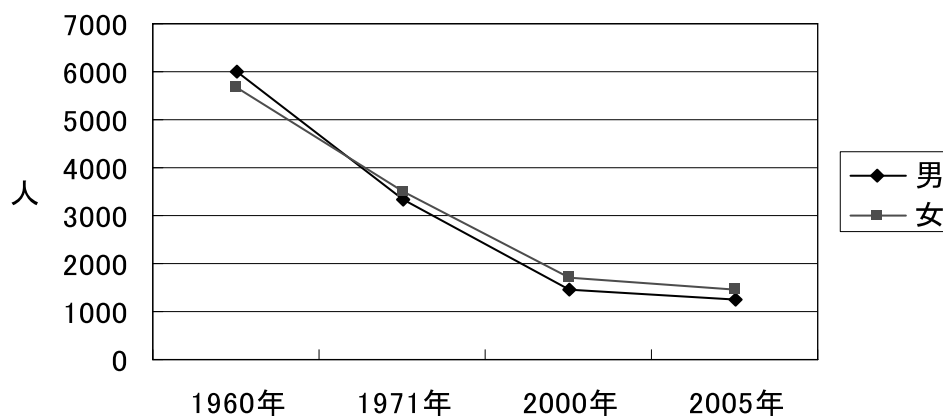


表4 男女比の変遷



出所：1960・1971は『続物部村史』より、2000・2005は国勢調査データより作成



写真1 農作業するSさん（久保堂ノ岡にて）



写真2 中上集落にはもう人は住んでいない



写真3 中尾集落の廃屋（屋号は「オヤシロ」）

ダム建設に反対しなかったことを後悔している。移住者はバラバラになり、集まったりすることはなく、村の氏神やお堂も今はない。時々、ダムの水が少なくなると沈んだ町が姿を現すという。

③農地の耕作放棄

人口流出と高齢化は、農地の耕作放棄につながり、村の景観も変えた。昭和30年代は、まだ山の景気も良かった頃で、村を出て行く人達は自分の山の畑に植林をして出て行った。杉や檜は、大地から水を大量に吸い上げ、多くの谷の水が枯れた。住友が村のあちこちで水を取るようになり、さらに谷の水は減った。植林した木が伸びると、木の影で下の畑は日当たりが悪くなり、作物が作れなくなった。結果、同じように植林せざるを得なくなり、草山は今のような姿になった。多くの山畑が耕作放棄され、現在焼畑を行う農家はもうない。そうした環境



写真4 水通の町はダムの下にある

の変化に加え、村に多くいた猟師の減少も大きかった。植林により下草が生えなくなり、獣は餌を求めて村に下りてくるようになった。鳥獣被害は深刻で、農作物が大きな被害を受けている。数少ない鉄砲討ちが駆除も行っているが埒があかない状況で、住民は被害に打つ手がなく、見守るしかない状況である。このことについて、榎山最奥大字別府の山の上にある中尾集落のMさんに聞いた話が興味深かった。昔、人より獣が強かった時代があった。人は本当に貧しく、筵さえも食べて生きつないだ。人は豊かになり、獣より強くなった。しかし、今は人と獣の関係が逆転しようとしているのではないかと。

④交通発達の弊害

上葦生側の道は、まだ一車線の県道で狭い状態だが、榎山側には国道が通っている。国道ができて徳島―高知間の行き来は便利になった。最近では、多くのライダー

がツーリングでここを通過して行くようになった。物部別府落合のOさんは女ひとりの暮らし。夜にバイクが家の前に止まって、エンジン音を立てる。うるさくて夜は眠れないし、強盗に入られるのではないかと恐怖感を覚えている。

⑤気候の変化・災害

物部は標高200mを越える場所にあり、平野部よりも気温は低い。戦前には、冬になると1mぐらい雪が積もることもよくあった。だが最近は、雪もほとんど降らない。温暖化の影響は確実に出てきている。また、雨もよく降るようになった。土砂崩れがどこかしこで起きている。別府中尾の中尾谷では、最近、大雨でコンクリートの補修工事の防土堤が一瞬で流されてしまった（写真5）。村の人々が、保ってきた自然との良好な関係は確実に壊れつつある。

⑥薄れゆく信仰

各集落（大字ごと）には氏神があり、集落の構成員はその氏子である。物部には、氏神、山神、水神、金比羅、八幡などさまざまな神社・社・堂がある。春、夏、秋には、祭礼が行われ、盆踊りや相撲の奉納が行われていた。現在では、この神社の祭礼も、人が少なくなり、3回行っていたのを2回もしくは1回にしている集落がほとんどである。いくつもの神社をそれぞれ祀ることが不可能になり、神様を1カ所に集めたりするケースも多い。一方で、忘れ去られた社も多くある。また、祭りをを行う「い

ざなぎ流」の太夫も少なくなっている。

（2）村の課題と村人の声

2007年物部村は、香北町、土佐山田町と市町村合併し、香美市となった。中心である市役所は平野部の土佐山田町に置かれ、ますます物部が周辺部に追いやられていくことは確実である。ここでは、旧物部村の今後について村の課題と村人の声から考えてみたい。

①農業

先に物部村では山畑の耕作放棄が進んでいると言った。一方で、物部では比較的耕作条件に恵まれた田んぼを柚子畑に変えることによって農業が維持されている（写真6）。柚子は手入れも米に比べれば楽で、値もする。現在、245世帯を越える柚子生産者が物部にはいる。結果、合併前には物部村は全国で柚子玉の生産高No.1の市町村となっている。しかし、ここには重大な欠点が存在している。実は、柚子生産者のほとんどが高齢者で農家の跡を継ぐ第二世代はいないのが現状である。つまり、いくら今トップでも10年もすれば、人口減少とともに物部の柚子生産も落ち込むことは目に見えているのである。

さらに問題はある。全国生産高No.1の特産品を生産する物部村が合併して、同じ山村で柚子生産地の馬路村が合併せずに生き残れたのか。それは、物部が現物生産なのに対し、馬路村が加工品生産に重点を置いている点にある。前者は安く買い叩かれるのに対し、後者は加工する分、利益が上乘せられる。特に、馬路の柚子加工品は



写真5 中尾谷の土砂崩れ現場



写真6 田は少なく柚子畑が多い（影仙頭）

ブランド化されていて知名度も高く、今後も可能性があるし、魅力がある。しかも、近年、多くの村で柚子が作られるようになり、値は落ち続けているという。

こういった現状を、村の人達は自覚している。昔は、何でも調達できて、何でも金になった。でも今は、金になるものなんか物部にはない。また、柚子を作る人達に対して、伝統的な農業（米作）を維持したいと考えている人も多い。しかし、元から米作自体が自給的なものであり、山間部という悪環境もあいまって規模を大きくしても、労働に見合った収入が得られないという現実があり、規模は小規模化している。何より、昔は米を作っても食えないような状態だったが、米は買えばあるのが現代である。

②第二・第三世代の流出

村にはほとんど第二・第三世代はいない。第二世代の人の中には、生まれ育った土地で暮らしたいと言う気持ちはあるのだが、物部では学校も少なく、子供の教育・環境のことを考えたら、山にいるより平野部に出たほうがいいと考える人が多い。第三世代は、まず仕事がない。農業では食って行けない。なにより、町や都会の方が若者にとっては刺激がある。人間の欲望はとめどなく、良い所があると知ればそちらへ行きたくなる。情報化社会では貧しくても精一杯の満足とか、いい暮らしだったという観念は生まれづらい。

③共同体の閉鎖性

旧物部村には、ほとんど大地主といった人がおらず、戦後の農地解放の影響は受けていない。そのため、村内部での生活格差は小さくなく、共同体内の結束力は非常に固い。一方で、よそ者を共同体内に入れない閉鎖性を併せ持っている。よく聞くのが「新しく来た人だから知らない」という声で、新しく来た人は神社の氏子でもないし、村の行事にも参加できない。共同体的な秩序にはいい側面もあるが、悪い面もある。

④村人の願いと村の今後

こういった課題に対して、村の人達のほとんどが、この村はやがては消えてなくなるんだ。だからその記憶や

歴史を記録して残してもらいたいと言う。現状を認めつつも、決して悲観的ではなく、昔の事を語ってくれる村の人々の姿はどこか楽しそうである。前近代的なものを多く残すこの山村は、その性格故に滅び行く運命にあるのかもしれない。しかし、滅び去って後、再びこの地を開拓することがあるかもしれない。その時に必ずや村の歴史的遺産が生かされるのではないかと思う。

しかし、これらの山資源は、戦後日本の高度経済成長とライフスタイルの変貌とともに必要とされなくなり、村の暮らしや景観は変わった。とはいえ、この地域が土地とともに歩んだ歴史は上記に記したとおり今も村の人達の記憶に息づいていたのである。

5 | 結論－「限界集落」化の歴史的プロセスに見る山村の未来－

3章の生き生きとした山村の姿と4章の悲惨な山村の現状、これが「限界集落」化以前と以後の山村の姿である。両者の比較から「限界集落」化の歴史的プロセスを考えるうえで重要なのが山村の生業である。

高度経済成長以後、山村が最も強く受けた痛手は、その発展を支えた生業の衰退であった。

山村生業の中心だった材木流しは、戦後トラックの出現により徐々に陸上輸送へ移行するとともに衰退し、中継地として栄えた岡ノ内、大栃、美良布、神母木の旅館や料亭は姿を消してしまった。材木も外国材に押され、農地を潰して植えた杉や檜の価値もほとんどなくなった。川船も道路の整備とともに、姿を消した。牛も耕運機の導入とともに必要なくなり、賃牛の慣行もなくなった。重要な収入源であった炭も、ガスや灯油の導入により姿を消した。三桠や楮も、チップや石油を利用した新しい紙の出現により必要とされなくなった。また、生活様式の変化とともに、障子紙の需要も減った。傘紙も、和傘が洋傘に押され始め、山田も傘の町としてはやっていけなくなった。

生業衰退の要因は、高度経済成長に伴う生活様式の変化によって山資源が必要とされなくなったことにあった。山資源の需要がなくなったことにより、山間部は平野部



写真7 柳瀬立花にて話を聞く著者（右）

や都市部との結びつきや関係性を失い孤立していったのである。大野氏は、「限界集落」化のプロセスを高度経済成長による地域間格差の進行や林業衰退に求めたが、これらは山の生業衰退以後に起こった現象であり、「限界集落」化を決定づけた要因でもあったのである。

近年、山村と平野部、都市部を繋ぐ河川の流域や源流域を人括りにした地産地消や交流を進める動きが全国各地で起こりつつある。村起こしは、単に村の特産物売り出したり、観光を売りにするだけでは長続きしてこなかった。それは、これまで見てきたように、近代までの地域発展が地域と地域の関係性・結びつきを前提として

きたという歴史的プロセスを十分に認識できていなかったからである。

しかし、一度失った地域間の結びつきを取り戻すのは容易ではない。中山間地域の現状は、先に見たようにいくら手をつくしてもどうしようもない現状にある。一筋の光は、近年の世界的な穀物不足と食の安全への日本人の関心の高まりである。近年需要の高まる小麦やトウモロコシ、大豆、小豆などの雑穀類は、もともと日本の山村や農村が作ってきたものであった。ノウハウや環境適正はある。しかし、集約的な日本の農業では、大量生産を前提としておらず、採算が合わない。その代わり、日本の農産物には完成度の高さと安全性という大きな武器がある。これらを生かす政府の本腰を入れた政策の実施が必要である。

その際、重要なのは、単なる新しいものの導入や改革でなく、その地域が歴史的に保持してきた環境やノウハウをどのように生かすかである。過去に山村社会は、そのノウハウを生かして発展してきた。その歴史的教訓にいかにより学び、状況に応じて変えていくのか。進歩させることだけが意味のあることではなく、立ち止まって過去を振り返ることもまた必要であるということを認識する必要がある。

【注】

¹ 2006年に国土交通省が過疎法指定の755地域の6万2,273集落を対象に行った調査（「過疎地域における集落の状況に関するアンケート調査」）によれば、前回調査を行った1999年以降7年間で191集落が消滅、「65歳以上の高齢者が半数以上を占める集落」いわゆる限界集落が7,878集落（12.7%）。「いずれ消滅する可能性のある集落」は2,643集落、このうち「10年以内に消滅の可能性のある集落」は423集落となり、事態は深刻化している。

（国土形成計画策定のための集落の状況に関する現況把握調査（図表編）<http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha07/02/020817/02.pdf>を参照）。

² 集落の自治機能とは、集落の自治、生活道路の管理、冠婚葬祭など、共同体としての機能を指す。

³ これまでこのような現状は、「過疎」という用語で表現されてきた。しかし、「過疎」という用語で全国の集落を一括りにしては、その実態は把握できず、危機への認識も深まらず、対応策も現実的なものとはならない。より深刻な集落の実態を指摘するために生まれた用語が「限界自治体」「限界集落」であった（ふるさと保全ネットワーク2008）。

⁴ 大忍荘に関する主な研究として、横川1959、秋澤1995・2005、米家1996などがある。

⁵ いざなぎ流に関する研究として、小松ほか1999、小松2006a・bなどがある。

⁶ 集落ごとの聞き取り調査の記録は、拙著2008に報告されている。

⁷ 上生川・横山川は、村の中心である大板で合流し、物部川となる。

⁸ 『香北町史』『物部町史』を参照。

⁹ 郷は50戸以上個数がなければ設置されない。

¹⁰ 大忍荘が熊野新宮造営料所に指定されたように、この地域の材木資源が早くから開発されていたことは間違いない。その材木搬出は大忍荘の庄域を越えて、物部川を利用して行われたと考えられる。この際、『土佐日記』（承平四年（934））にも現れた、国府の外港である物部川旧河口のラグーンのほとりであったとされる「大湊」の存在は無視できない。特に、中世期には山田堰などの堰はまだ設けられておらず、直接物部川の河口まで材木を搬出することができた。中世期の材木搬出は、近世期のような城下町高知の消費に応えるものではな

く土佐国外の消費を目的としていた。しかし、中世期の材木搬出の実態を知る史料はなく、庄域を越える材木搬出をどのような手続きで行っていたのかなどの詳細は不明である。

近世になると、野中兼山によって山田堰が開発される。山田堰は、兼山が物部川に完成させた町田堰、上井堰の上流に位置する。寛永十六年（1639）に着工し、寛文四年（1664）まで26年をかけて4つの枠の構築法により、松14万本、大石約1,110坪を使用して長さ180間、幅6尺、高さ5尺の大堰を完成させたものである。建設の目的は、この地域の新田開発を目的とした井堰の開発（西に三閘、東に一閘で平野部に四本の用水路を完備）と、城下町高知の建設による都市市場の形成に伴う交通網の整備にあった。材木は、流木と筏流しの二種類あり、荷揚場所は神母木で止まるものと高知までの流しがあった。特に、山田堰の建設に伴い、物部川から筏は舟入川へ入り高知城下新堀まで運ばれるようになった。また、筏組した材木に加え、製材した板材も運搬された。

¹¹『香北町史』によれば、山から伐り出された材木は川岸まで運び、筏に組むかあるいはそのまま流した。筏はカヅラで材木を一間巾位に組み、長いのはそれを10から15程つなぎあわせ、前にかいをつけ川の中の石にかからないように上手に操って川を下った。筏乗りは筏の長さによって数が違ったが長いには3人も乗っていた。筏に組まずにそのまま流すのを「流し」といった。めいめいとび口を持ち草履ばきで次から次へと順次材木に飛び移り、あるいは石にかかった材木を引き寄せたりして流して行くもので、多い時は川一ぱいと思われる程の材木を15人から20人で掛け声も勇ましく渡していったとされる。

¹² 後にはワイヤーを引いて出すようになった。

¹³ 中世期の相論関係文書に頻繁に瀬（「荒瀬」）や淵（「落合」）が登場するのは、材木搬出の際にこのような場所が重要な意味を持っていたからではないかと考えられる。

¹⁴ 川を堰きとめて、木材を流す堰流しの技術は、昔は秘法であった。丸木もしくは板で川を堰きとめて、すき間にコケを詰めて、水が漏れないようにする。その技術は信州から横山の方へ伝わってきたらしい。技術を教えてもらった人が、技術が人に伝わるとまづいので、川下に降りた信州の人を、堰を切っておぼれさせて殺した。その墓が、今も川淵に残っているとか。

¹⁵ そのため、岡ノ内、大柵、美良布、神母木などは旅館や料亭が立って中継地として栄えた。なお、岡ノ内の川口には貯木場があって、材木の搬出地ともなった。

¹⁶ 近代における物部川の川船については、坂本1994に詳しい。

¹⁷ 船は物部川の急流に合うように底の浅いひら平だ舵船で、長さ四間半・巾一間程、米の場合には20石程度は積載可能の大きさで、神母木までのものと高知城下まで行くものがあった。2人の船子が乗り込み、1人は舳先、1人はともに立って急流をたくみに操って神母木まで下った。また、逆に神母木から大柵まで川を登る船もあった。これは主に在所産の米を送ったもので、船子4人が乗り込んで、1人当たり3俵の割合で12俵程の米を積み、2人が「主綱」といって12尋位の長い綱を1本ずつ川上にひき、1人は「かざこ綱」という三尋程の綱を引きながら竿で船を操り、残り一人は十尋程の「とも綱」をひき、力をあわせて大柵まで引き上げ、落合で荷物を下ろし、帰り荷に物資をつんで流れを下った。また、図2の史料に見える「高知通用船」は、楮、三桎、木炭、煙草などの物資や年貢を積んで、神母木から舟入川に入ると10隻程度の船団を組んだ。「ユル番」に料金を払って支流の水をせきとめ舟入川の水量を増やしてもらい、後免から先は「もやい綱」で船をつなぎ合わせて、大津のおとしでは綱を解いてめいめいに通り、大津を過ぎるとまたつなぎ合わせて高知に着いて、農人町、棒堤、掘詰などへ荷物をつけた。帰りには「あげ荷」といって商品を買って帰った。

¹⁸ 三桎は紙幣の原料となるものである。笹のナナヘツイでは偽札を作っていたという話もあるとか。

¹⁹ 皮を剥がず黒皮のまま出すのが「ジケ」、皮を剥がしてさらし白皮の状態にして出すのが「サラシ」で、白皮の方が高く売れた。大正期までは白皮で出すことが普通だったらしいが、昭和になってからは黒皮のまま出すこと珍しくなくなった。加工した三桎は、仲買人が各集落に買いに来た。

²⁰ 三桎は繊維が細く弱いことから、主に作られる障子紙には合わなかった。たまたま、三桎を楮に混ぜて紙を作ることもあった。なお、三桎はお札の原料として、平野部へと搬出された。

²¹ 三桎も同様だが、黒皮に比べ白皮にしたものは高かった。また、白皮の状態にして出されたのは大正までで、昭和になると黒皮のまま出すことが一般化していたらしい。

【参考文献】

- ・秋澤繁1995「土佐の山村 ―大忍庄横山を中心として―」網野善彦・石井進編『中世の風景を読む 第六巻 内海を躍動する海の民』新人物往来社
- ・秋澤繁2004「大忍庄」『講座日本荘園史』10 四国・九州地方の荘園、吉川弘文館
- ・石川純一郎1980「土佐旧横山村における焼畑農耕の民俗と「焼畑文化」」千葉徳爾編『日本民俗風土論』弘文堂
- ・大野晃1991「山村の高齢化と限界集落」『経済』1991年7月号、新日本出版社
- ・大野晃1992「現代山村と地域資源」『経済』1992年12月号
- ・大野晃1993「現代山村と地域資源」『経済』1993年1月号
- ・大野晃2005『山村環境社会学序説』社団法人農山漁村文化協会
- ・ふるさと保全ネットワーク2008「新・田舎人インタビュー 農山漁村の危機！『限界集落』への対応と地域再生」『季刊 新・田舎人』第55号
- ・大野晃2008「限界集落の実態と地域再生への道 ～山村の新たな展開を目指して～」『地方議会人』2008年6月号
- ・楠瀬慶太2008『新・生涯横山風土記―高知県香美市域120人から聞いた村の歴史・生活・民俗―』花書院
- ・小松和彦2006「民俗社会のなかの「陰陽師」の存在形態」『宗教民俗研究』第14・15号合併号
- ・小松和彦2006「民俗社会のなかの「陰陽師」の存在形態・再考」『比較日本文化研究』第10号
- ・小松和彦ほか1999『土佐・物部村 神々のかたち』INAX出版

- ・米家泰作1996「中世山村の境界と山地地形―土佐国大忍荘横山の名領域」『人文地理』第48巻第1号
- ・米家泰作2002『中・近世山村の景観と構造』校倉書房
- ・坂本正夫1994『土佐の川舟民俗誌』和田書房
- ・佐々木高明1972『日本の焼畑』古今書院
- ・渋谷康一郎2006『高知県経済の現状・課題と活性化』2006年度第1回定例会・シンポジウム「高知県経済の現状と課題・・・活性化の方向性を探る」報告資料
- ・松本実1963『物べ村志』物部町教育委員会
- ・松本実1968『香北町史』香美市教育委員会
- ・横川末吉1959『大忍庄の研究』市民叢書13、高知市民図書館
- ・横川末吉1961『長宗我部地検帳の研究』市民叢書15、高知市民図書館

なお本稿は、2008年度笹川科学研究助成（研究課題「中・近世農村景観の復元的研究 ―土佐国韮生・横山地域を中心として―」）による成果の一部です。